

「有賀千代吉関係資料」をめぐる基礎的考察（1）

—「戦犯」たちとの書簡を中心に—

太田久元・横島公司

はじめに

立教小学校の創設と発展に多大な貢献を果たした有賀千代吉は、膨大な資料を立教小学校に遺している⁽¹⁾。それら資料の一部は、立教学院史資料センター（以下、センター）に寄託され、資料整理・登録作業がすすめられる。二〇一〇年、「有賀資料」の重要性が認識されるに及び、有志による「有賀資料勉強会」（以下、勉強会）が立ち上げられ、本格的な資料調査に乗り出すこととなった⁽²⁾。勉強会の発足メンバーの一人であった筆者（横島）は、当初有賀資料を、木戸幸一、畑俊六、荒木貞夫、鈴木貞一、大島浩、賀屋興宜など「戦前日本における国家指導者たち」との書簡が多数含まれていた点を重要視し

ていた。特に、書簡がやり取りされていたのが一九五二～五五年前後という時期に集中していた点も、深く着目する理由の一つであった。いうまでもなく、この時期は巢鴨拘留所（スガモ・プリズン）に収監されていた彼ら（A級戦犯たち）の釈放に向けた機運が、国内で高まっていた時期にあたっていたためである。

こうした点を踏まえたくうえで、筆者は立教学院史という観点から、次の論点を提起した。それは、「なぜこの時期に、有賀と戦犯たちとの間でこうした書簡のやり取りが頻繁になされていたのか」、その事実関係の解明である。もちろん彼らとのやり取りそのものの「是非」を問うことではない。学院史とのかかわりのなかで、それらがあくまで「私的」な立場でのやり取りだっ

たか、あるいは立教小学校関係者としての立場からの、いわば「公的」なやりとりだったのか、その「境界線」を明らかにすることを目指したのである。その研究成果の一部を、二〇一二年に「資料紹介」⁽³⁾として公開したが、有賀千代吉という人物像の解明は今後の重要課題として提起するに止めざるを得なかった。こうして「有賀資料」の研究は、おのずと有賀自身の人物像の解明という側面も帯びることになっていったのである。

その後、立教小学校所蔵の「アイヌ民具」と有賀との関係が解明され⁽⁴⁾、さらに舟橋正真氏により有賀と皇族とのかわりが明らかになるなど⁽⁵⁾、有賀研究が蓄積されてきたことを踏まえ、筆者は本格的な有賀研究に着手する時期がきたと判断した。

筆者は現時点において、「有賀資料」は、三つの観点から重要な意義をもつ、きわめて多様な資料と認識している。

- a・立教学院史（立教小学校の歴史）に対する貢献
- b・日本占領期研究（東京裁判研究）に対する貢献
- c・戦後日本のアイヌ文化とキリスト教との関係

以上を踏まえ本稿では、aおよびbの観点からの基礎的な研究として、現在整理が進捗した「有賀千代吉関係

資料」A—(1)—①「旧国家指導者」(A級戦犯、A級戦犯を含む)の翻刻部分を公開する。

なお、本稿における概要説明は横島公司(学院史資料センターセンター員)、原資料の翻刻は、太田久元氏(学院史資料センター助教)がそれぞれ担当した。

1. 資料の分類

「有賀資料」は、その多面的性格と膨大さから、現在は「有賀千代吉関係資料」と新たに仮称され、二〇二〇年現在は、次のように分類されている。

A. 巻物

- (1)「書簡」 一三点⁽⁶⁾

- ①「旧国家指導者」(A級戦犯、A級戦犯を含む) 七五点

- ②「その他」(立教学院関係者、他校関係者、所属不明者を含む) 一六六

- (2)「その他」(切手類) 一一点

B. 冊子⁽⁷⁾

- (1)「新聞資料」(大陸新報を含む) 一三点

- (2)「収容所関係」 四点

C. 物品⁽⁸⁾

- (1) アイヌ民具(パチエラー八重子寄贈資料)

六三点

※今後、資料の発見等に伴い、これら区分は適時変更・追加される可能性がある。

2. 資料の概要

続いて、資料について簡単な概要を述べよう。

まず巻物とは、有賀自身が巻物状の用紙に貼付・保存した書簡・封筒、私的コレクション等を指す。資料整理の段階で、これら巻物資料を(1)書簡と(2)その他に分類し、さらに(1)は「旧国家指導者」と「その他」を分け、それぞれ①②と枝類した。本稿で公開するのは①「戦前日本における国家指導者たち」との書簡である。原資料では、手紙(本文)のみの場合と、手紙と封筒がどちらも貼り付けられているものとに分かれている。

彼らの手紙は発信先がスガモプリズン(巣鴨刑務所)と、別の住所のものに分けられる。これは収監中と釈放後という、時期の違いによるものであろう。一方、彼らから有賀に宛てては、有賀の自宅(と思われる)と立教小学校宛のものが混在している(一部、別住所のものもある)。現代的な感覚では、宛先によって公・私の手紙を分けたのかという想像も可能であるが、内容を読む限りさほど住所による変化が見えないので、そういう区分をしているわけでもなさそうである。なお封筒からは、有賀および彼らの現住所(当時)がわかるが、個

人情報保護の観点から本稿では記載せず落としている点を予めお断りしておく。

他方、彼らからの手紙には概して年月日の記載がなく(とくに畑が顕著である)、あるいは月日のみ記載(木戸幸一など)が大半である。これについては、封筒の消印や手紙の内容からある程度の推測が可能であったため、本稿では可能な範囲で年月日を推測し、補記部分に記載した。

なお手紙のやり取り数は、最も多いのが畑俊六(四八点)、ついで木戸幸一(一四点)、荒木貞夫(六六)とあった具合である⁹⁾。換言すれば、畑がもっとも「まめに」返信してきたということになる。

本稿ではこうしたA―(1)①資料のうち、翻刻がすんだ四八点を収録した。

登場する人物は畑俊六、木戸幸一、賀屋興宜など、A級戦犯およびA(エーダツシユ)級容疑者¹⁰⁾を中心とし、一部その他の人物とのやり取りも加えた。

内容については、それぞれ一読していただくのが一番であるが、文面からはそれぞれの人柄や、その時々々の問題関心などが伝わってくる。また手紙には、有賀からの「差し入れ」に対するお礼が頻出するが、ここから、有賀がスガモ訪問の際、彼らに様々な「差し入れ」を頻繁

に行っていたことがわかる。また手紙からにじみ出る彼らの個性や人間性も興味深い。

例えば木戸は常に折り目正しく、一方、畑は「日教組と違って有賀先生の学校は素晴らしい」といった「直截」な感想をしばしば書き記している。ちなみに畑は一九五四年四月六日に慶応病院に入院していたことが既に明らかになっているが、手紙の内容も、この時期身体の不調が続いていた事実を裏打ちするものとなっている⁽¹⁾。

一方、彼らが一様に戦犯釈放運動に強い関心とそれぞれの思いを示していたこともわかる。当事者としては当然の思いではあったろうが、細かな差異も確認できる。

有賀は、こうした交流を繰り返すことで、彼らと個人的な関係を構築していったことが確認できる。有賀自身の戦犯に対する思いを伺い知ることは出来ないが、しかし少なくとも有賀に戦犯に対する悪意があったようにも感じられない。よく言えば共感的な内容、悪く受け取ったら、けっこう上手く会話を合わせている印象である。彼らからの返信内容は概して有賀に好意的であり、同意を得た、我が意を得たような、そういう文面も垣間見えるためだ。

一方で、有賀が彼らと頻繁にやり取りを繰り返していた理由については未だに不明のままであるが⁽²⁾、キリスト教徒として「慰問」するため、スガモプリズンを訪問

したという可能性も、現時点では排除しない⁽³⁾。時系列的な事実関係としては、戦犯たちの接点のスガモプリズンの訪問によって生まれ、その後の頻繁な訪問活動の結果として書簡の往来がなされる関係性を築き得たと考えられる。しかし、「世間の評判」という観点から考える限り、こうした戦犯たちとのやりとりが立教小学校(学院)にとつて、全面的にプラスに働くとまでは思いがたい。

いずれにせよ、こうした有賀と戦犯たちのやりとりは立教学院の了承を得た上で行われていた活動であったのか、それとも有賀個人の活動だったのか、この点の解明が、今後も有賀研究における大きな課題であることは間違いない。

いずれにせよ、こうした戦犯たちの戦後における日常や肉声はこれまでさほど伝わっておらず、それがわかるという意味でも、珍しい資料であることは確かである。今後さらに検討を深めていきたい。(横島公司)

註

(1) 有賀千代吉(一八九六一一九八七)、長野県出身。一九二〇年、立教大学商科を卒業後、満鉄に入社。その後カナダ・バンクーバーへと渡り、現地の新聞記者となる。記者の傍ら現地の小学校教育に力を注いだ(「神と」)が、太平洋戦争の勃発により、強制収容所に抑留される。その後交換船でシンガポール経由で帰国。シンガポールで有賀は、捕虜収容所の捕虜の子供たちを教えたとされ、そうした有賀の来

歴が、後に佐々木順三（立教大学総長、当時）の招聘につながったとされる。終戦後、丸の内に司令部を構えた英軍の事務所にて通訳の仕事に従事していたが、一九四八年一月、佐々木順三の招聘を受け、立教小学校設置の協力を決意する。同年三月、立教小学校設置により同校教頭、同年七月主事となる。一九五八年、校長（第三代）に就任、一九六一年退職。退職後、再び海外へと渡り、一九八七年、ロサンゼルスにて客死。

(2) 当初は鈴木勇一郎学術調査員（当時）のもと横島公司センター員を中心とし、その後、太田久元助教が加わった。

(3) 横島公司「資料紹介・有賀千代吉資料」（『立教学院史研究』第一〇号、二〇一三年二月）。

(4) 横島公司「有賀千代吉とバチエラー八重子―立教小学校所蔵のアイヌ民具資料からみえるもの」（『立教学院史研究』第二三号、二〇一六年二月）。

(5) 舟橋正真「なぜ皇族は戦後の立教を訪問したのか―三笠宮崇仁来学を中心に」（『立教学院史研究』第一七号、二〇一〇年二月）。

(6) ここでの分類は、現時点（二〇二〇年二月）段階の仮のものである。また書簡の正確な数についても、今後の研究によって、変動する可能性があることを予め述べておく。

(7) B. 冊子は、有賀自身の手による冊子類である。大判の冊子に、新聞記事や小物類、資料、メモ等をこまめに、丁寧に貼り付けて保存している。有賀の「まめ」な人柄が伺える。新聞記事は、昭和一〇年代にカナダで刊行されていた現地の邦字新聞『大陸新報』の原本が複数含まれている。またカナダでの強制収容所での日々を伝える文書、メモや、そこで手にした物品等が数多く保存されている。収容所での様子やうかがい知れる、貴重な資料である。Bについては、今後、研究

の進展に伴い適時公開していく予定である。

(8) C. 物品については、拙稿（横島二〇一六）を参照のこと。

(9) 二〇一二年以降の調査で点数が追加された。

(10) A級とは、巢鴨プリズンに収監されたA級戦犯容疑者のことを指す。

(11) 小宮山登編『元帥畑俊六獄中獄外の日誌 前篇 巢鴨日記』（日本

人道主義協会、一九九二年）一八九頁。

(12) 筆者はかつてこの点について、創立当初の立教小学校の課題であった資金問題との関連について指摘した際、有賀をよく知る伊藤氏から「有賀先生は）そのような方ではない」と生前お話をしていたことを入づけて伺った。貴重なご指摘である。一方で、筆者の意図が「お金目当てで有賀は彼らと付き合った」ということでは決してない点については改めて強調しておきたい。むしろ後年、同じ教派に属する「同胞」のため、当時まだ航空便も開設されていない北海道にまで足を延ばし、バチエラー八重子を訪ね、アイヌ民具を引き取ったエピソードからも伺えるように、有賀は決して損得勘定だけで動くタイプの人物ではないことは確かだ。何より戦犯である彼らは、「かつての権力者」であったことは確かであるが、「過去の人物」であったことは否めない。つまり、筆者はあくまで「立教小学校の安定という目的のため、「様々な手段」を講じる」タイプの人間だったのではないかと感じている。つまり、立教小学校の安定につながる（かもしれない）人脈作りの一つとして「有力者との関係を構築する」という発想があったのではないかと、という推測である。だが、仮に、有賀の目的が人脈作りであったにせよ、元総理や大臣、内大臣・公爵、さらには三笠宮にまでコンタクトを図るほどの「豪胆」な人物である。こうした有賀自身の人物像を踏まえた上での説明が今後必要であろう。

(13) 詳細については『立教小学校十年史』を参照のこと。

3. 有賀千代吉資料〔A―(1)―①〕

一、畑俊六書簡

1. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

昨夕は態々御来所誠に勿体なき電気毛布御惠贈被下、何とも御礼の申上様も無之、唯々恐縮致外無之、昨夜早速使用宛然春の如き暖気に安眠御高志難有満喫仕候。

老人何を以って御芳情に答へむ。唯々感謝の他なく早速御礼迄如斯に御座候。

三日

有賀千代吉様

畑俊六

2. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙難有拜見

寒冷の候にも不拘益々御健勝大慶至極に存します。鈴木氏の御高配誠に感激に堪へぬ次第ですが、先般は各位の御厚意に依り勿体なき電気毛布頂戴。それに毛布は先づ不自由なく支給されておりますから、御志は十二分に頂戴致しますが、どうか御心配なき様呉々も御伝え下さる様願上ます。

日に増し寒さも加はります。何卒御自愛の程、偏に折上ます。

十二月十四日

有賀千代吉様

畑俊六

3. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙難有拜見致しました。

畑俊六…一八七九―一九六二年。元帥陸軍大将。陸軍大臣、支那派遣群総司令官等を歴任し、東京裁判でA級戦犯として終身刑。

一九五三年二月

一九五三年

獄中年賀状でもあるまいと遠慮致しましたが、益々御健祥御多端之趣大慶至極に存じます。

橋本虎之助元中將も死亡が確認せられました様子、陸大の同期生でもあり、別組に隊しておりまして。満洲国の参議であつた事で、ソ連の裁判に附せられ不幸な死を遂げられましたことは返す、も御不幸のことであると御同情に堪へません。それに比べると、老生の如き陸軍の最長老として首も繋り、各方の御同情を得て居ますことは誠に幸福であるともうしまししょうか考へ様であります。御校に奉職せらるゝ御令息に宜敷御伝へを願ひます。

鈴木様より御招待の御伝言、誠に難有御礼申上ます。

4. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

色々と御厚意に預ており感謝致しておりますに、尚御寵招とは所謂寵に忤れるものでありますから、今度は御辞退致したいと思ひます。強てと仰せらるゝならば、春永に季候がよくをもちましてから御情致したいと思ひますので、甚感謝ながら右様御伝へ下されば幸であります。

先は御返事迄。昨今急に寒くなりました。何卒御大事に願ひ上げます。

一月二十五日

畑俊六

有賀大兄貴下

5. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

校務頗御多端にも不拘、益々御清祥の趣大慶至極に存じます。

昨日は態々御使を以て結構なる品々御贈与被下、再ひの御芳情何とも御礼の申

橋本虎之助元中將…一八八三
（一九五二年。陸軍次官、満洲
国参議、参議府副議長を務めた。
陸大…陸軍大学校。畑と橋本
は二期。

満洲国の参議…満洲国参議

一九五四年一月か

一九五四年四月一七日消印

校務…立教小学校の学校運営
の業務

上様ありません。厚く御礼申し上げます。
不取敢御礼迄。余寒峭しき折柄折角御自重専一と祈上ます。

二月六日

有賀上兄

畑俊六

一九五四年

6. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

其後は誠に御無沙汰致しまして申訳なき次第であります。益々御健祥。新学期之初めに色々御多忙のこと、存します。先日は又々誠に結構なる品々頂戴。鯉は一同割鮮に舌鼓を打ち難有頂戴致しました。老生去る六日慶応病院に入院。頂戴の煙草は当方へ転送致されました。難有御礼申上ます。老生の病気は大したことありません。何卒御放心を願います。先は御礼迄。

呉々も御大事に。

四月十六日

畑俊六

一九五四年

慶応病院・慶応義塾大学病院、
新宿区信濃町。

有賀仁兄

7. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

昨日は誠に見事なる花束態々御贈与に預り、いつもながらの御芳情感激の至り難有御礼申上ます。

病床の退屈これに増したる頂戴物は無之、恐縮致しております。別に変わりも無之、身体は自由とて散歩に出歩く次第、何卒御放心下さる様。監獄の高堀もなく娑婆の臭気紛々としておりますれば紛れております。

先は御礼迄御多忙のお身上とて折角御撰養までと祈上ます。

四月二十日

有賀千代吉様

畑俊六

8. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙難有拝見致しました。益々御健祥御多忙の趣、大慶至極と存します。又々過分の御心遣に預り、唯恐縮の外はありません。難有深く御礼申上ます。老生の病気も其後変化の模様もなく、朝は外苑に散歩に出かけ、病院の入浴が頗不便でありますので、医師の許可を得て日曜に限り時々外出を致し、帰宅入浴致しております。何卒御放心の程願上ます。

世相も益々混乱して参りました。どうなることやら考へると、甚以て心細き次第です。何卒御校だけは日教組などの魔手にかゝらぬ様、貴方様のような校長を戴く学校は幸福です、何卒御健斗を願ひます。先は御礼迄、益々梅雨となりました。折角御大事に。

有賀仁兄 六月十五日

畑俊六

9. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

昨日は御多用中態々御見舞被下、実は甚尾籠なる話ながら、偶々用便中にて僅に十数分室をあけましたところ御出被下、看護婦が何と申上けしことやら室に帰つて見れば、御名刺拝見折角の御見舞に不在に致し、何とも申訳次第も無之、御高意に背き、何卒不悪御海恕下さる様願上ます。其折又々見事なる花束御惠贈被下、毎度ながらの御高情感激の外なく難有御礼申上ます。

一九五四年五月一三日消印

日教組…日本教職員組合。

一九五四年

入院以来既に一ヶ月を超えましたが、別に変わりもなく何卒御放心下さる様願上
げます。

右不取敢御詫旁々御礼申上度時下折角御自重の程偏に祈上ます。

五月十二日

有賀千代吉様

畑俊六

一九五四年

10. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙難有拝見致しました。色々御多忙の御様子、益々御健勝之趣、大慶至極に
存します。老生も其後別に変化はありません。御放心下さい。病院生活、既に三ヶ月
余もう飽きて参りました。御活躍誠に羨望至極デス。米国側の発表で我等の前
途も確定致しました。中々嚴重にやるのには敬服の外ありません。

又々御芳情に預り、唯々恐縮の外ありません。深く御礼申上ます。別に食物に制
限がありませんから、何か好ましき物を御厚意に代へたいと存じます。
先は御礼迄。何卒御自重専一と祈上ます。

七月二十一日

畑俊六

一九五四年

有賀千代吉様

11. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙拝見益々御清祥御多忙の趣、大慶至極と存します。又々御高情に預り、恐
縮の外なく厚く御礼申上ます。老生も入院以来既に半歳、真の病因は腹を開け
て見ねばならず、さりとて老年手術に不堪別に苦痛もありません、先般のア大統
領宣言により最低十年は巢鴨に居らねばならず、十年と申せば来年一杯となり、

来年一杯病院に居るといふことは却て苦痛の種でありますから、医師にも相談し来月二十七日月曜日一先退院、巢鴨に引揚げ、其後は時々自宅療養でも致さんと心算致居ます。右様の次第に付、不悪御了承被下度尚何分宜敷御願申上ます。在院中は誠に以て一方ならざる御配慮に預り、難有御礼申上ます。

巢鴨に帰りますれば、自然御目にかゝる機会もあるべく、御出の節は一応電話にて御連絡下さるべく、さもなければ帰宅中にて或は不在し御迷惑かけるべきかと存します。この自宅療養も勿論公然のものに無之もぐりの仕事なれば、心中頗る忸怩たるものあるは止むを得ざる次第であります。

先は御礼迄。右の如く、漸く秋気爽涼の好氣と相成りました。何卒御大事の程祈上ます。

九月二十二日

畑俊六

有賀大兄坐下

12. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

今度老生仮出所につき、早速御懇書に預り難有御礼申上ます。

実は慶応に入院半年、別に変化なく痛でもなさそう等とのことにて去月二十七日一先退院、巢鴨に帰りました処、法務省、外務省側は依然入院といふことになつており、また近頃A級戦犯出所が問題になつておるから、此際外分上再入院して呉れとのこと留守宅に近き関係上、二十一日に目黒区大原町第二国立病院に入院の手續を採り、二十六日に入院しました処、全月午后急に発表となりたる次第であります。全く予期もせざりし処、これも偏に御同情御后援の致す処と篤く御礼を申上ます。

一九五四年

昨年三十日正式の許可証めいたものを貰ひました。これで十年間の巢鴨と縁を切つた次第であります。直に留守宅に帰るのもあまり現金故、今暫く居つて呉れとのことに出数日来月五六日頃まで入院致し、それから帰宅致す積りでおります。表面上どこまでも重病の態となつておりますから、各方面の挨拶など一切ぬきに致し、此点是非常に助かりますが、巢鴨へも来月十日過ぎ御訣れに行く積りでおります。以上の様な有様でこの上は天の摂理に従ひ、凡てを天に任せて静かに余生を送り度心底であります。茲に改めて年久しく戴きました御好意に深く御礼申上、尚今後共不相変御指導御交誼を願て止まぬ次第であります。何れ其内拝晤万事御礼を申上ます。不取敢御礼迄。時八日に増し向寒。何卒御大事に。

十月三十一日

有賀千代吉様

畑俊六

13. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙拝見。先日は御多用中連絡、態々御光来御懸聞下過分な品々頂戴毎度ながらの御厚情感激の外なく難有篤く御礼申上ます。鈴木氏の件つい御心易立に御耳に入りました処、早速御話被下、恐縮至極何とも申訳なき次第です。早速鈴木さんには御礼を出します。

明八日午后退院隠宅の方へ引揚げます。今後共何分宜敷御願申上ます。会津会の方に來十二日御出下さること、恐らく武藤さんが御見えになると存しますが、当日午前は仮出所後初めて巢鴨に参り、一応礼を述べたいと思ひますので、若し武藤氏と御面会の機会でもありましたら、午后に願へぬものでしょうか、一言御伝へ被下されば、幸甚です。とんだことを願ひ甚勝手ですが何卒不悪。十二

一九五四年

会津会…一九二二年設立。
会津出身者による親睦団体。

日以外なくばいつても結構デス。
右御礼旁申述度、日に増し寒さに向います。何卒呉々も御自重専一と願上ます。

十一月七日

畑俊六

有賀老兄坐下

14. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御懇篤なる御手紙拝見致しました。其後御無沙汰致しておりますが、益々御健勝御活躍の趣、大慶至極に存上ます。老生も退院后、時々病院に参り診断を受けておりますが、別に異状もなしとのことでありませう。乍爰外御放心の程願上ます。是非一度参上御礼を申上たいと存しておりますが、兎角外出不精と相成、加わるに年末の雑闘に年寄など押倒されそうでありますに腹痛風も手伝ひ乍思失礼致しております。何卒不悪御海恕下さる様願上ます。何れ春永にてもなりましたら、是非参上年末の御好情に対し御礼を申上たいと存念致しております。

近頃は唯一日縁に日向ボコリに暮しておりますが、巢鴨在監中に緊張も弛み、老然自失の躰、人間無為の苦しみを熟し満喫致しました。さればとて仕事もなく意気なき短かき余生をボンヤリ暮らすのも苦しいものとの経験を致しております。巢鴨に残れる九人の僚友に対し、一人家庭に暮らすことは誠に申訳なき次第であります。老生も飽迄病氣療養のこと、て表面に立働くことも不出来、何か老生にふさわしき釈放運動あらば御用命の程願上ます。

日に増し寒さ相加はります。何卒御自重、芽出度御迎歳之程偏に祈上ます。

十二月二十五日

畑俊六

有賀千代吉様

一九五四年

腹痛風・腹痛風(邪)、ある
いは痛風か

一九五四年

15. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

拝呈

其後は御無沙汰致しております。誠に申訳ありませんが、益々御清適御多忙のこと、御慶申上ます。

昨日は又々信州産紅鱒沢山御恵贈に預り、毎々恐縮の外なく御芳情十分難有御礼申上ます。

不取敢御礼迄申上度、日に増し冷気を加へます。何卒御自愛の程偏に祈上ます。乍末御奥様にも宜敷御鳳声の程願上ます 敬具

九月三十日

有賀大兄

畑俊六

16. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

拝呈

昨日は態々速達を以て鴨一眷御恵与被下、只々恐縮の外なく千万難有御礼申上ます。年末特別に御配慮に預り、常に色々頂戴仕り御芳恩感謝之辞をも不知次第只管感激致し居る次第であります。頂戴致しましたる美事なる珍珠は早速難有頂戴致しました。

其後はしかく御無沙汰致しておりますが、益々御清適御多忙のこと、拝察致しております。老生も病状別に変化なく、唯毎日忙然と暮しておりますから、何卒御放心下さる様願上ます。

帰宅以来既に半年近く、其後後続者もなく誠に申訳なく有しておる次第であります。

一九五七年

先は不取敢御礼迄申上度、何れ其内拝趨万々御礼申述度と心組み致しておりま
す。春寒当料峭何卒御自愛專一と祈上ます。

三月十四日

頓首

有賀千代吉様

畑俊六

一九五五年

17. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

拝復

前島照定師の御紹介により、御高著外沢山御惠贈被下、御芳情感激の至り難有
奉温謝候。

なるべく多くの人々に読ませて頂く為、当所の文庫並に病院へも頒ち申候間御諒
承願上度、先は不取敢御礼迄如斯に御座候。
残暑尚峭しき砌折角御自重專一と奉祈候。

敬具

八月廿四日

有賀千代吉様

畑俊六

一九五二年

18. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

拝復

二十九日には態々御来所被下候趣折悪しく止むを得ざる所用にて、一時外出致
恰度其不在中にて甚以て失礼致候次第、不悪御海怨被下へく候。

結構なる品に御贈与に預り、恐縮至極御芳志難有御礼申上度、御所望ノ件は長

前島照定師…一九五二年八月
二三日、畑俊六に対し有賀千
代吉を紹介したのが前島で、
その後の有賀と畑との交流と
なる。

きは十数年も母の膝下を離れたる巢鴨戦犯の切々なる衷情を御聞きになるのも、又可然と存し、若い人々に所感を求め候間、右御了承被下べく先は御侘旁々御礼迄如斯に御座候。

時は風雨兎角小順御自重専一と奉祈候。 忽々

九月二十二日

有賀千代吉様

畑俊六

19. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙難有拜見我等一同の身上に關し、誠に行届きたる御同情御配慮に預り、感激至極難有深く御礼申上候。

当所内、我等起居の一班は既にご承知のこと、は存候へ共、去る四月末日本移管と相成候てよりは、同胞愛の暖き温情より監獄局間の同情ある取扱により、何一つ不自由も無之、書籍新聞雑誌は例の赤い本の外は何等制限もなく、文庫も中々豊富なり。食も老生の判断よりすれば、世間恐らく中以上なるべし。入浴は毎日許され、運動も所内到的る処自由に有之、家族知人等の面会も自由に許され米軍時代には面会は三重の金網を隔て、なしありしが、今は此金網も全然撤去せられ、特に近來は出身県より知事以下幹部連他其御家族の集団面会あり。到底普通の刑ム所には想像せられざる光景に有之。戦犯に対する世間一般の同情に感激措く能はざる次第に御座候。

監房も独房は一人雑房四人と相成、独房は方丈に満たざる二畳ながら、洗面所便所も同室にあり、到底一般家庭に見る能はざる便利あり。我等老人は誠に難有便利を喜ひ含申居候。以上の如き次第故起居等には御配慮誠に感激の至ながら、決して御心配被下間敷唯家族と起居出来ざる苦痛あるも、これも監獄として

巢鴨戦犯…スガモブリズン収監者。

年不明

戦犯に対する世間一般の同情に感激措く能はざる次第…サンフランシスコ講和条約発効後戦犯釈放を求める署名運動が全国で実施され、戦犯釈放運動が行われた。

当然のことに有之。此の如き運命を負ふこと其事か天命の致す処と存居候。
右御礼旁御返事申上度、秋涼ながら兎角不順の御折角御自重專一と奉折候。

不備

九月十七日

畑俊六

有賀千代吉様

追伸

1) 運動具ハ野球ピンポン何でも揃つております。昨今は柔道までやつております。

碁、将棋、麻雀はスツカリ揃つております。

2) 郵便は一通ハガキ二回、封書一回は官費で出しております。

其以上は県の慰問にて出しても不自由はありません。

3) 面会は誰でも制限はありません。

20. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

拝呈

先日は御多忙中、態々御来所被下難有御礼申上度、又乍毎度の御心遣感激ノ極み難有奉深謝候。

セーヤー氏も来朝の趣、有田八郎氏等とも会見せられたるや、我等戦犯に寄せられたる同情感謝の外なくパロール制も漸く動き初め在所者一同も漸く愁眉を開き、多大の□みを懐き居り何卒御援助御推進願上度在所者一同の起居も既に御承知の事と存し、本年は野球をやる者もなく、碁、将棋、麻雀等に興するものもなく全く万事手に着かざる心境にして、若い人々に対しては誠に同情に堪へざる次第、BC級の連中は一日も早く出処家庭に帰らしめ度ものと念願致居候。如斯焦

一九五二年

セーヤー氏（フランシス・B・セイヤー）…一八八五〜一九七二年。米国務次官補を務めた後、日米開戦時フィリピン高等弁務官であった。一九五二年一〇月三十一日、ヘンリー・K・シェリルアメリカ聖公会総裁主教の使節として来

燥気分であれば、自然行動も軌を逸するものなしとせず、或は在所者兎角の評も御耳に入りあること、存し、其点よりするも一日も早く出所せしめるを必要と存候。

米大統領も二十年振りにて、共和党に御鉢が廻り候が外交政策、特に我国に対する政策は如何、何に致せ在野二十年の空白は争ふべからず、当初は相当ヘマもあるべしと存候。当所固禁者は共和党は戦犯に有利なるべしなど果敢なき望をかけ居申候。

先は御礼迄、当時ハ折角御自重偏に見祈る。

十一月七日

有賀千代吉様

畑俊六

21. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙難有拜見。肺炎御罹病の処幸にも御快復、先以て大慶至極深く御喜申上候。

戦犯の釈放、減刑も一向に進展せず、如何なる理由か存ぜされとも、巢鴨の連中は焦燥絶望感に誠に気の毒千万に御り候。在監連中が大切か、旧軍人なる為逃亡、暴行等の犯則もなく、何れも神妙に致し居るに当局はそれをい、ことにして捨て置くにあらざるやなど申す者も不尠、今や断絶の頂点に達しあるやに感せられざるにあらざる。折角御后援、政府は固より聯合國側を御督促被下度案が世間には戦犯なるもの、実状等を承知せざるもの多く、過般中戦犯の釈放を以て全部釈放せられたるものと思考するもの不尠、況んや最關係深き米國にて戦犯に關心なきは当然と存し、平和克服の今日戦犯の急速なる解決の必要を米國人一般に知らしむる要、切なるものありと感し居候。況んや西欧諸國などは關心浅き

日、一九五九年にはFOR
(立教後援会)会長となる。

有田八郎氏…一八八四—一九
六五年。外務大臣などを務め
た。

BC級の連中…BC級戦犯受
刑者。

一九五二年か？

は当然に有之。是非共米國が此等西歐諸國、並に濠洲、ニュージランド等を指導するにあらざれば、到底解決の途なく、世界平和の爲にも人道の爲にも戦犯の処理は必要と存ぜられ、一体将来の世界平和の爲、戦犯を処置したるに、今日何れの方面にても特に国連などにも、戦犯は一向問題とならず我等は唯単に報復の爲に処分せられたるに止まり、何等平和に貢献したるものなし。

実は数日一時出所したる為、御見舞遷延不悪御海怨被下度。
寒さの折柄、御病後折角御要心專一と奉願候。 忽々

十一月三十日

有賀千代吉様

畑俊六

一九五二年

22 有賀千代吉宛畑俊六書簡

連日寒氣烈しく御病後如何御伺申上ます。

先日は態々御門下山下君を御遣はし御慰問被下、いつに変わらぬ御厚情誠に感謝感激の外ありません。又、例の通り御寄贈し預り、誠に恐縮至極謹みて難有御礼申上ます。老生も世事唯寒いの閉口致しております。御経験のあることですが牢屋は寒いですな、それに米軍時代と異なり、暖房も頗不十分ぢぢがまっております。

クリスマスも近いて来ますが菓鴨日人は何か吉報があるへしと心待ちしておりますが、今の処では何事もなさそうですな、何もなければガツカリするでしょう。空益々峻悪になること、思ひます。

先は御礼迄御病後呉々も御大切に祈り上げます。

十二月十四日

一九五二年

有賀千代吉様

畑俊六

23. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

又々御病氣之由承はり、既に御本復のこと、は存候へ共、其後如何御見舞申上候。本年の正月は誠に暖かき正月なりしも、何となく身体も引しまらず流感流行の趣、折角御自愛の程偏に奉願候。

クリスマスにも何事もなく、一月聊か落膽の然、英国かなり意地悪きことを申し居る由、仄聞致候へ共、如何なものにか英国も下さらぬことにこだわる様に相成、こまつては落陽の運勢同情すべきものに御座候。先は右御見舞迄。

一月八日

有賀千代吉様

畑俊六

24. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

其後益々御健祥のこと、存じます。

今日は又々煙草沢山御贈与被下、毎度ながらも御芳志何にも御礼の申上様もなぐ厚く御礼申上ます。

A級老人連も再々の御厚情に感謝しております。一同に代りて御礼申上ます。時候柄御大事に。

二月十三日

有賀千代吉様

畑俊六

一九五三年

A級老人連…A級戦犯受刑者の意であろう。

一九五三年

25. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

昨日は復活祭とて、誠に見事なる花束并に御便を以て一同へ御贈与被下、再度ながらの御芳情、誠に感激の至り難有御礼申上ます。折角の御好意とて一同鑑賞の上、当所病院患者へ煩^{わづら}ち度と存じております。

老生、中国在勤中上海軍の上海報道部長たりし横山彦眞と申す大佐中議論の正しき人ですが今は国際敬愛会の理事長をしておる人です。セーヤー氏宛の名刺をも所持しておると申しております。是非一度貴方に参上して御指導を受ける様申しておきました。或は参上致すかも知れませんが、罷出ましたら御引見御指教を御願申上ます。

温春四月桜咲くの好季、世は太平と申し度し。ソ聯の先手く^くに世間は全くかき廻はされているこの大事な時に国内は政争く^くどうなることやら巢鴨にあつても心配でなりません。

先は御礼迄。折角御大事に祈り上ます。

四月五日

畑俊六

有賀先生

26. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

御手紙拝見致しました。既に御帰京と存します。随分雨に御困りだつたと存します。次での極暑御変りしまりませんか。始終誠に感謝至極の御心尽し、何とも御礼の申上様もあります。難有頂戴致しました。

暑中御伺旁御礼迄呉々も御大事に。

一九五三年

八月五日
有賀千代吉様

畑俊六

一九五三年

27. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

昨日は御病後にも不拘態々御来所御慰問を辱ふし、種々御高話拝聴御好情難有御礼申上ます。其節、特に老人の為誠に結構なる品々頂戴、毎々の御高志感激至極であります。ユタンポは早速A級全員に分配御高配難有頂戴致しました。先は不取敢御礼迄申上度、呉々も寒気の折柄御用心までと願上ます。 忽々

十二月十八日

畑 俊六

一九五二年

有賀千代吉様

28. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

今度は私よりお誘ひ申上たるにも不拘徹頭徹尾御荷物御厄介に相成、色々一寸ならぬ御迷惑相かけ、何とも御詫の申上様ありません。深く御詫を申上ると共に、身に余る御厚情に対し千万難有御礼申上ます。帰来、身体の調子も宜敷山高水冽の信州の山河脳中を去来して、身は市井に離隔に居るを忘れて居ります。 何れ其内参上万事御礼を申上ますが、不取敢御礼を申上ます。何卒御身御大切に。

五月三十日

畑俊六

一九五五年

有賀先生

29. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

先日は失礼致しました。昨日は珍珠沢山御恵贈被下候。恐縮の至り難有御礼申上ます。早速結構に賞味致しました折柄、来訪したる長野県出身の老夫人にも若干頒ちました処、非常なる喜びでした。この夫人の如きは別の住宅の屋根に巢喰へたる蜂の子さへ取つて料理して喰へる程の人ですから、其喜びは御想像がつくと思ひます。重ねて篤く御礼申上ます。

気候頗小順何卒呉々も御大事に。

奥様にも宜敷御鳳声願上ます。 忽々

七月一日

畑俊六

有賀老台坐下

30. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

其後御無沙汰致しております。本年の夏は格別の暑さでありましたが、御見舞をも不申上失礼致しました。定めし益々御元氣御多忙にて御幕しであつたこと、存します。老生も日に増し老耄の度を加へますが、別に異状もなく唯徐に其日々を送つております。

塩原よりの御ハガキ難有拝見致しました。秋爽の裡に御行楽、誠に羨望の至りであります。塩原より結構なる品々御恵贈被下度々の御同情恐縮に堪えません。

難有御礼申上ます。

同地方は往年老生が宇都宮師団長時代時々参りました処、特に懐しみを覚え、特に土産は親しみを感ずる物でありまして、御贈与に因り昔を想ひ出しました。

巢鴨の方も一方ならぬ御尽力に依り、近来急に解決の速度を加へ、特にA級は案

一九五五年

外の特典、木戸氏なども来十二月十六日が満十年でありますれば、仮出所は間違ひないこと、存します。

荒木老も先般出所、益々元氣目下時事新報に万丈の氣焰を吐かれあること、聞きました。誠に結構なこと、思ひます。

先は右御礼迄。何レ其内拜晤の機を得たいと思ひます。

鈴木氏も一家悉く改名の由先般通知を貰ひました。鈴木君も全く徹底したる一偉人と思ひます多幸を祈度次第であります。

時下折角御大事に乍末奥様にも宜敷御鳳声を願います。

九月二十七日

忽々

畑俊六

有賀千代吉様

一九五五年

31. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

先日は御手紙難有く存しました。

御問合せの件直地に防衛庁の者に連絡致しましたが、未だ採用等の確定期日なく、願書手続の書類も出ておらんそうですが、近く決定せる、筈で機を失せず連絡致すとの返事でありました。其節は直ちに御連絡申上ます。何卒右様御了承を願ひます。

其後御無沙汰致しておりますが、御病氣の方は既に御全快のこと、存します。老生も日に増し老耄を加へますが、どうやら其日を送つております。

先は右御返事迄。偏に祈御自重。

四月十一日

畑俊六

一九五六年

木戸氏…木戸幸一

荒木老（荒木貞夫）…一八七七～一九六六年。陸軍大将。

陸軍大臣、文部大臣等を歴任し、東京裁判でA級戦犯として終身刑。

有賀大兄坐下

32. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

拝呈其後御無沙汰致しております。益々御健勝のこと、存じます。

御親戚里河内君防衛隊技術將校受驗の件、第一回葉職□□試験にて撰に洩れられたる由、誠に残念至極。老生が依頼したる井本陸将も如何とも致し難しとのこと。更に今秋再試験を受ける、様にと、井本も申居ります。里河内君も井本と御面会のことと存じます。何卒貴下よりも全力再々御勧めを願ひ度、物凄き志願者の由デス。

昨日は高原名産の蜂の子態々御惠贈に預り、始終頂戴物許り致し恐縮の外なく御厚情難有御礼申上ます。

右御礼迄申上度氣候頗小順何卒御自重専一と祈上ます。

忽々

七月八日

有賀大兄

畑俊六

33. 有賀千代吉宛畑俊六書簡

其後御無沙汰致し申訳ありません。益々御健勝のこと、存じます。老生も其後不相変ブラ／＼致しております。

御令甥里河内君の防衛庁御志望の方は如何になりましたか。御案し致しております。

昨日は御旅行先より美味沢山態々御恵与被下、毎々の御好意恐縮の外なく難有御礼申上ます。

不取敢御礼迄。何れ其内参上の方々御礼申上ます。

里河内君防衛隊技術將校受驗の件…有賀千代吉の甥の里河内は海上自衛隊を志願し受驗した。

井本陸将(井本熊男)…一九〇

三〜二〇〇〇年。一九五四年

統合幕僚会議事務局長(陸将)。

一九五六年か

風雨兎角小順御自重偏に祈上ます。

忽々頓首

十月四日

有賀千代吉様

畑俊六

二、木戸幸一書簡

1. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復御懇書並に加納君の説教集槌に落手致しました。又、煙草沢山に御惠贈被下難有拝受致しました。御芳情の程厚く御礼申上ます。

加納君とハ四谷の学習院の校庭で別れて以来、相見ざること半世紀に近いのですが、本日御惠贈下さいましたネブラスカチャーチマン紙上で再会誠に懐しく感じました。学生時代よりは肥満せられて髪も黒く小生に比べて、非常に若いのに驚きました。年から云へば小生より一つ二つ上だと思ひますが、説教集はゆる／＼と拝読致し度いと思つて居ります。在留日本人の為の心の糧とどれ程なつて居ることかと、誠に心強く感じます。小生よりも御便りしたいと存じますが、住所を失念致しましたので、御序の折り御教示被下ば幸甚に存じます。畑君は未だ病院ですが当初疑を持たれた癌疾でハないとのことですから、其内又々吾々の仲間に帰つて来られるのではないかと思つて居ます。先ハ不取敢御礼迄。

木戸幸一

六月三十日

有賀千代吉様

一九五六年か

木戸幸一…一八八九—一九七七年。文部大臣、内大臣などを歴任し、東京裁判でA級戦犯として終身刑。

加納君（加納久憲）…上総一宮藩主加納久宜の三男。アメリカに移民し、牧師となり、アメリカ、カナダの日系人社会とつながりを持つていた。一九七六年に『在米同胞の一人として…加納久憲自叙伝…アメリカ生活六〇年』を出しており、立教大学図書館が所蔵している。

年不明

2. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拜復御懇書辱く拝誦致しました。夏休みとはなりましても、生徒の御指導に中々御多忙の御様子に拝しますが、其中にあつて御心にかけられ結構な品御惠贈に与りましたこと、御芳情の程、誠に難有厚く御礼申上ます。丁度夕食前に手許に届きましたので、早速一同に頒ちました。急に暑気の加はりました折柄、絶好の暑氣払ひとて、一同大喜びで頂戴致しました。小生、其後相不変元氣にて、此頃は折々は帰宅も致し、のんきに過して居りますから、乍他事御休神下さいまし、先ハ不取敢御礼迄。

有賀老臺

梧右

木戸幸一

昭和二九年七月二九日

3. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拜啓過日は御懇書と共に結構なる品御惠贈に与り、いつもながら御厚情の程御礼の言葉もありません。早速一同と共に一流中の一流の美味を満喫致しました。一同から厚く御礼申上て呉れとのことでありました。早速御礼申上べきの処、暫く帰宅致して居りました為め、大変遅くなりまして申訳ありません。何卒御海容下さいまし。

加納君からハ、先日誠に御懇切の手紙を戴き、四十年のギャップを一度飛越してしまつた様な氣持になりました。其中、又当方の近況でも御伝へしたいと思つて居ります。

先ハ延引ながら御礼迄。愈々今年も押つまりました。目出度御迎春の程祈上ます。

十二月二十日

有賀老臺

梧右

幸一

一九五四年

4. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復尊翰並ニ貴著ロツキーの誘惑御送り被下辱く拝受致しました。貴著ハ早速繙読致しました。同じ様な境遇にありますだけに不安焦燥の御氣持等誠によく判りまして興味深く読みました。看守の将校や兵の当にならぬ言明、不意打の移動等全くこの生活でも同じなので思はず微笑を禁じ得ませんでした。又、一九二八年に信愛学院に有馬君を訪られたとの條に至り、真に世の中は広い様で狭いものだと思ひました。有馬君は四五年先輩であります、学生時代からの親友で、あの信愛学院は、私も其の創立者の一人なのであります。こゝやつて見ると、未だ拝眉の機を得ないのが、寧ろ不思議な様にすら思はれます。尚又、加納君への航空郵便封筒難有御座いました近々便りをする積りで居ります。先ハ乍延引御礼迄。

十月二十一日

有賀千代吉様

木戸幸一

5. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復先月二十八日御認めの御懇書辱く拝誦致しました。又速達は昨夜落手是亦難有存じました。神戸に於ける基督教々育同盟総会に於て吾々戦犯釈放に就て決議して下さいました由、誠に心強く存じます。先日も御話申上げました様に此の問題が有終の成果を挙げます迄には、迂餘曲折がまだあること、存じます。

ロツキーの誘惑…一九五二年、有賀が戦時中、カナダでの強制収容所での生活を書いた書籍。有馬君（有馬頼寧）…一八八四～一九五七年。伯爵。農林大臣等を務めた。信愛学院に有馬君を訪られたとの條に至り…一九一九年、有馬頼寧は労働者のための夜学校信愛学院を設立。

基督教教育同盟…一九一〇年、男子校一〇数校で発足した基督教教育同盟会のこと。現在は一般社団法人キリスト教学

従つて、即急に解決し得る等とハ考へられませんが、外の方々の熱心なる御同情により、あらゆる機会あらゆる場所に於て、行はるゝ運動によつて始めて晴れたるを見る事ができること、思つて居ります。それにハ、一面署名運動の如き大衆運動も無論必要でありますが、多面宗教団体等がそれ／＼の分野で識者に訴へて戴くことが却つて、實質的にハより有効であらうと存じます。今後とも繰返し御尽力の程を御願申します。セーヤー元総督来日せられ、相当長期間御滞在の由同氏の如き、有力者にハ是非此の問題を判つて戴く様に御尽力下さいまし。尚、大谷氏へハ今朝早速傳へて置きました。先ハ御礼旁々御返事迄。

十一月二日

幸一

有賀老臺

梧右

6. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拜復去る二十二日御認め尊翰辱く拜見致しました。又、貴著「北米平原の使徒加納先生」も落手早速むさぼる様にして読みました。加納君兄弟は、学習院時代私の畏敬して居た友人でありました。久朗君とハ其後も折々会ふ機会がありまして、今日迄種々ときき指導を得て居りましたが、久憲君には学習院で袂を別つて以来、四十数年の間殆ど其消息を聴く機会がありませんでしたので忘るゝともなく忘れて居りましたが、今貴著を繙いて偉大なる同君の業績を知り、且つ驚き、且つ敬服しました。同君の今日迄歩かれた途から見て、同君は学習院卒業生の中で殆ど唯一とも云ふべき特異の存在であると共に母校の誇りであります。又、同時に同君を友人に持つ私の誇りでもあります。真に其の人を目の当りに見るが如き、生き／＼とした御描写を以て、同君の消息を御伝へ下さいましたことを心

校教育同盟となつてゐる。

戦犯釈放運動…一九五二年サンフランシスコ講和条約発効を契機に活発化した戦犯の減刑、釈放運動。

セーヤー元総督(フランシス・B・セイヤー)…前に注記あり。

一九五二年

久朗君(加納久朗)…一八六八～一九六三年。上総一宮藩主加納久宜の二男。子爵。横浜正金銀行に入行。戦前、国際決済銀行取締役を務める。公職追放解除後、日本住宅公団初代総裁、千葉県知事となる。久憲君(加納久憲)…前に注

から感謝し、御礼申上ます。尚、乍御面倒若し御ついででもありましたら加納君に宜しく御鳳声の程御願申上ます。先は不取敢御礼迄。

九月二十九日

木戸幸一

有賀千代吉様

7. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拜啓過日は御年末殊の外御多用中にも不拘、態々御光来被下ました処、生憎外出中にて、拝眉の機を失しまして誠に残念に存じて居ります。又、其節はいつもながら御心入の品々御惠贈被下一同にて心より感謝しつゝ、賞味致しました。厚く御礼申上ます。

愈々本年も押しつまりました。何卒御健勝に目出度御迎春の程祈上ます。先ハ御礼迄。

十二月二十七日

木戸幸一

有賀千代吉様

梧右

8. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復御懇書辱く拝見致しました。又御心入れの品々も落手、晚今学年末にて入学試験等にて、殊に諸多用の諸事と拝察致します折柄御心にかけてられ、御見舞下さいましたこと、いつもながらの御芳情、何とも御礼の言葉もありません。殊に白酒は入所以来、初めて口に致しますことにて、御節句には一同と共に楽み度いと存じて居ります。

記あり。

年不明

一九五四年

白酒…みりんや焼酎などに蒸したもち米や米こうじを仕込

小生、此頃は折々帰宅致して居りますので、早速御礼可申上のところ延引致しましたこと、何卒御海容被下まし。先は右御礼迄。

木戸幸一

二月二十五日

有賀老臺

梧右

尚一同ヨリモ呉々も御礼を申上られ度とのことで申添ます。

9. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復御懇書辱く拝読致しました。キリスト復活日に当り、御心入れの品々御惠贈に与り、いつもながらの御好情千万辱く感激を以て一同と共に頂戴致しました。嶋田氏も突然出所致しました。中々続々と云ふ様には参りませんが顧みますれば、既に四人は外で暮して居ります様な次第で、矢張り変化は好ましいことに思はれます。早速御礼申上べきの処帰宅致して居りましたため、延引の段不悪御諒承下さいまし。先は御礼迄。

四月十七日

幸一

有賀老臺

梧右

10. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復御懇書辱く拝見致しました。又其節は結構なるもの御惠贈に与り、いつもながら御芳情の程、誠に難有く厚く御礼申上ます。あれで皆と共に祝杯を挙げて出所の積りにしております。顧みますれば、随分長い間種々と御慰め戴きました。今

み、一ヶ月程度熟成させたもろみを軽くすりつぶして造つた酒のこと。ひな祭りの際に供えられた。
一九五五年

嶋田氏（嶋田繁太郎）…一八八三〜一九七六年。海軍大將。海軍大臣、軍令部総長を歴任し、東京裁判でA級戦犯として、終身刑。
一九五五年

出所と決まりました、一入しみぐと御芳情の胸にしみ入る思ひで、何とも御礼の言葉ありません。何れ出所の上は御目にかゝる機会もあるかと存じますが、不取敢以書中御礼申上ます。

十二月十一日

有賀千代吉様

木戸幸一

一九五五年

11. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝啓昨日は折柄の荒天にも不拘、態々御光来被下、且又イースターの祭壇に供られたる美事なる花を沢山に御惠贈被下、御芳情の程誠に難有心より御礼申上ます。御蔭様にて殺風景な白一色の部屋も忽ち美しくなりました。尚又其節は何よりの品併て御惠贈被下、是亦厚く御礼申上ます。一同よりも厚く御礼申上る様にと申上ました。先は不取敢御礼迄尚御二人の方へも宜しく御鳳声の程御願申上ます。

四月十九日

有賀千代吉様

梧石

木戸幸一

一九五四年

12. 有賀千代吉宛木戸幸一書簡

拝復御懇書並に御心入の品々正に拝受致しました。いつもながら、御心にかかれ御高慮賜りますこと、一同感謝の言葉もない次第で御座います。只畑君が一日も早く出所致しました為、折角の御氣持を畑君と親しく頒つことを得ませんでしたのは誠に残念に存じて居ります。御手紙は畑君へ送りまして、難有御氣持を伝えることに致します。餘ハ拝眉の節に譲り、不取敢御礼迄。

十一月十二日
有賀千代吉様

梧右

木戸幸一

一九五四年

三、賀屋興宣書簡

1. 有賀千代吉宛賀屋興宣書簡

拝啓 益々御清祥大慶の至りに存し上げます。

たび／＼巢鴨在所者の為め、御理解と御同情深く、釈放運動に御尽力遊はされる由承り、又今回は吾々老人にお想いやり深く、誠に重宝なる御品御惠贈に預り、誠に御厚情深謝の至りにあります。謹んで御礼申上げます。

吾々老人は兎も角として前途多きBC級諸君の為め、何卒御尽力の程御願ひ申上げます。

向寒の砌に御健康お大切に念し上げます。

十二月十七日

賀屋興宣

一九五二年

有賀千代吉様

侍史

四、小林躋造書簡

1. 有賀千代喜宛小林躋造書簡

有賀千代吉様

小林躋造…一八七七～一九六二年。海軍大将。連合艦隊司

二月二十一日 小林躋造

二十日お認めのお貴状難有拜見致しました。老生の病後に付御見舞を辱ふし、御厚情深く感謝致します。別に痛みもなく、家族と全様に寢食を共に致して居ります。何分癌の出来て居ました直腸を其保切りとられましたので、排泄物は左腹部にあけられた人工肛門より絶へず少量宛出て参ります為に、三、四時間毎に其始末をせねばならず、従て外出も出来ませんので、何誰様へも御無沙汰して居ります。不悪御許し下さい。近所の服部医博の云はれる所では、顔色もよく病前より少し肥へた所から見ると、癌は奇麗に採れたものと思ふとの事で安神して居ります。

巢鴨拘留所へも時々御慰問に赴かれます由、お示の通り、此頃はA級の人々は外出も自由になりました様子で、昨夜も私と全郷の元蔵相賀屋興宣君も来訪され緩談三時間、其保釈に付政府筋に話呉る、様申されました。賀屋君等は、自分等の事よりも刑死者の遺族の救済が急務だと長文の文書を置いて行かれました。私と吉田首相とは三十年来の親友で、私が戦犯容疑者として巢鴨に拘留されました時にも、其不当を米法務官に申入れられた様な次第ですから、賀屋君の文書を見られたら、何とか手段を講せられる事かと思ひます。何分A級の人々の赦免、減刑は講和条約第十一条に依り、往年の敵国十一の過半数則ち六国以上が全意しなければ実現しない事になって居ますが、旧敵国を牛耳るものは何と云つても米国ですから、米国の対日感情が良好でなければ甘く行くまい。総じて我国の再建には米国の全情なくしては遅々として進むまいと思はれますから、無暗に米国を悪く云ふ事は慎まねばならぬと存じます。

以上、下々な事を永々と書きました。春寒尚ほ厳しき折柄切に御加養を祈ります。愚妻からもよろしくお傳へ呉る、様申出ました。

令長官、台湾総督、翼賛政治会総裁等を歴任。A級戦犯容疑者としてスガモブリズンに収監されるが、一九四七年九月に釈放。

一九五三年二月二一日。

講和条約第十一条…日本が極東国際軍事裁判所、国内外の連合国戦争犯罪法廷が課した刑の執行規定と赦免・減刑・仮出所規定からなる。

不備

五 中山博二書簡

1. 有賀先生宛中山博二書簡

秋冷の候に相成りました。

御申越の「わが母のことば」は既に畑さんにも御送附になった模様でしたから、A級の方々をやめにしまして、若い層の大体智識層をねらつて依頼致しました。もうぼつ／＼御手許に届いてゐる事と存じます。今十通余り残して居ります。これは慰問に見える有名人に依頼する心組です。以上、私のとりました処置を報告致します。

時節柄御自愛專一に。

十月十四日 巢鴨プリズン

中山博二拝

有賀先生机下

年不明

(太田久元)

参考文献

- 小宮山登編『元帥畑俊六獄中獄外の日誌 前篇 巢鴨日記』(日本人道主義協会、一九九二年)。
小宮山登編『元帥畑俊六獄中獄外の日誌 後篇 陋廬日誌』(日本人道主義協会、一九九二年)。
中立悠紀「巢鴨戦犯全面赦免勧告への道程―吉田政権への戦犯釈放運動勢力の攻勢―」『年報・日本現代史』第二号、二〇一六年。
『立教大学新聞』第九二号、一九五二年一月二〇日。
秦郁彦編『日本陸海軍総合事典 第二版』(東京大学出版会、二〇〇五年)。
秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』(東京大学出版会、二〇〇二年)。
秦郁彦編『世界諸国の制度・組織・人事 一八四〇―二〇〇〇』(東京大学出版会、二〇〇一年)。

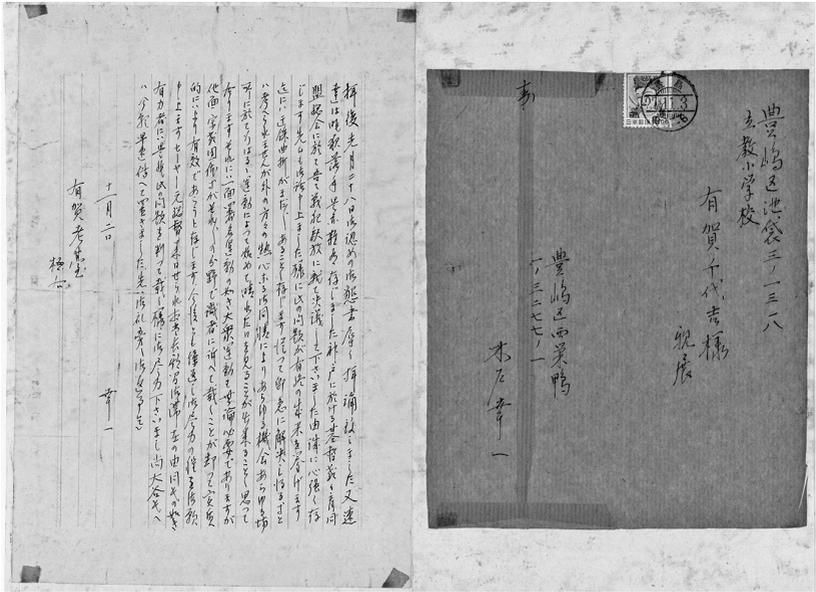


図1 木戸幸一の書簡

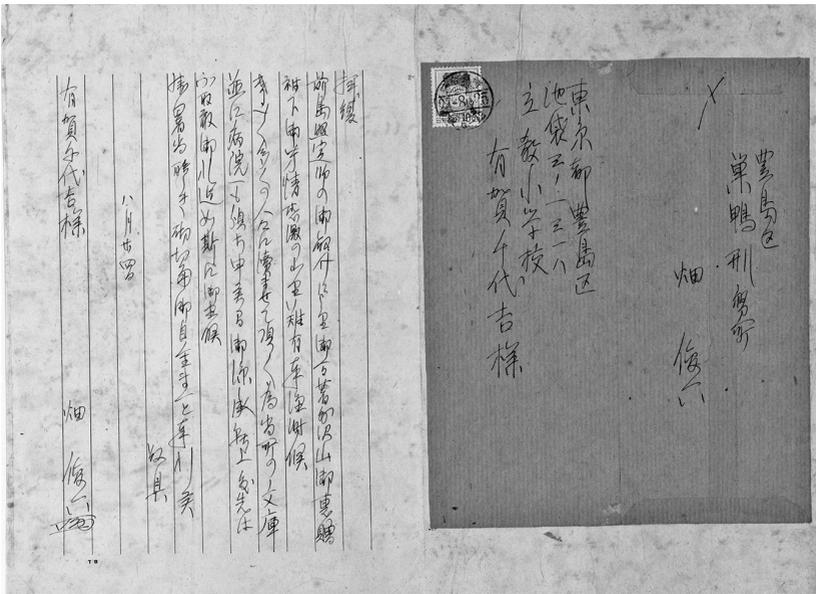


図2 畑俊六の書簡

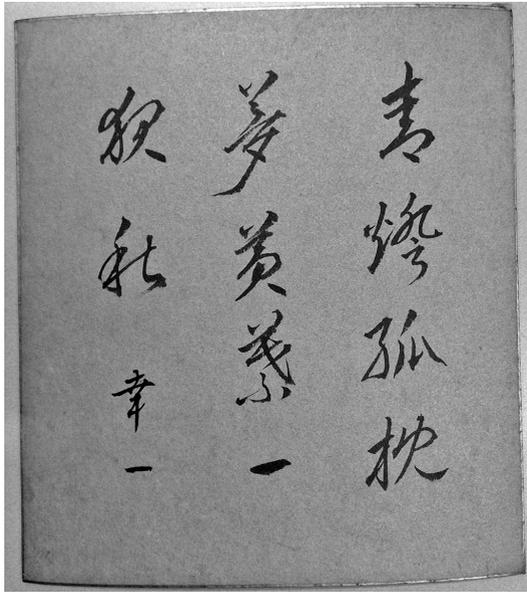


図3 木戸幸一の揮毫

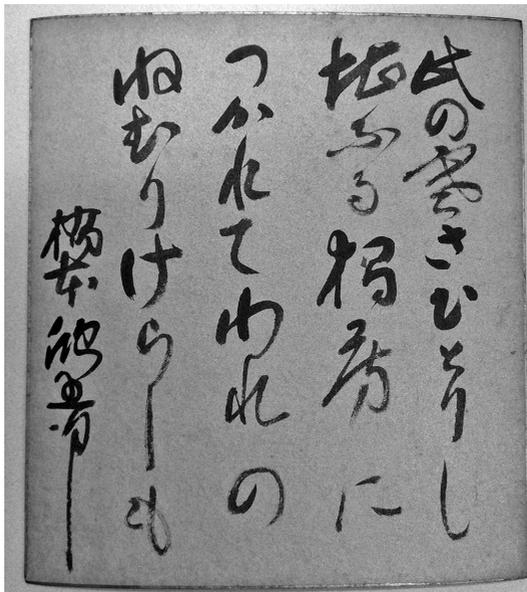


図4 橋本欣五郎の揮毫